The Zoological Society of Japan

あの吻部の異常な發育も第二次的といふ事が出來る。あの吻部の發育は外鼻道を取り卷ける細胞層から分泌する油脂質物の堆積によるとの事である。

(二)鬚鯨類の或るものは口を閉ぢたる儘餌を吸ふならむ。鯨類には哺乳類を食するもの、頭足類を食するもの、魚類を食するもの、及微細の浮游生物—翼足類及最も多くは小形の甲殼類—を食するもの等の區別がある。而して鬚鯨類には後二者が見られる。

一寸考へると鬚鯨類は口を開いて海水諸共餌を吸ひ込み、扨口を閉ぢて鬚で海水と餌とを濾し分ける樣に思はれる。魚類を食する鬚鯨類では多分さうであらうけれども、微細の浮游生物を食するものではそれでは說明が困難である。

何故かと云ふと微細の浮游生物を食するものでは殆どそれ許りで粗大の浮游生物や魚類などは食はれて居ないのである。若し前の方法であるならば是等粗大のものも食はれて居べき筈である。故にこの場合では粗大のものを口に入れずに微細のもの許りを口に入れる方法を用ゐるであらうと思はれる。

鬚の內側の緣には長い毛の密生がある。今鬚の列の間隙を通じて海水が出入する場合を考ふれば、海水が外から內に入る際は、毛が內に靡く故に、鬚の列の間隙を通り得る程の固形體に對して自由であるが、海水が內から外に出る際は毛が鬚の列の間隙を覆うて丁度綿を敷きつめた樣になるから最早先に入る事の出來た固形體をも通さない。この方法で口を閉ぢたまゝ海水を吸つたり吐いたりするとすれば、鬚の列の間隙に餘る程の粗大なものは口に入り來ないで微細なもの許りが入り來る筈である。

BEDDARD の著書によれば、脊美鯨の類は小形の甲殼類と翼足類、白長簀鯨と鱷鯨とは小形の甲殼類、長簀鯨と小鱷鯨とは魚類を食すとある。小形の甲殼類や翼足類を食するものは恐らく口を閉ぢた儘の方法、魚類を食するものは口を開く方法によるであらうと想像される。然しこの區別は飽く迄判然たるものではなく、その棲息する海の動物群の如何によつて混交するであらうかも知れぬ。鱷鯨も極稀には魚類を食して居る事があるとの話である。

(松本彥七郎)

●「アンビストマ」

米國に普通なるキモリ (*Amblystoma*) はアガシーの誤りて造り出せる屬名にして、原著者の TSCHUDI は一八三九年に *Ambystoma* とせり。無論今後も *l* なき綴り方を採用すべきなり。

(谷津直秀)

●蟻嬰兒を盲目とす

蟻が人體を害する例も稀ではない。內地の場合を擧げてもオホハリアリ (*Huponera solitaria* SMITH.) などは劇しく人を刺して痛を感じさせる、この蟻は少し濕つた所の木材の下などに巢を造るので、田舍の浴室などには

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

よく匍つて居て刺すことがある。又信州などの山地に行くと落葉松などの下にエゾアカヤマアリ (*Formica rufa truncicola* var. *yessoensis* FOREL) の巣があつて其の中に踏み込んだら最後續々と足を登つて嚙みつくのに弱らせられる。然しこの場合には刺すのではない、只嚙み附くばかりだから大して痛は感じない。兎に角蜂程に劇しく刺すことはないから人體に對する直接の害としては云ふに足りないものと思つて居た。然るに昨年の六月頃栃木縣の新聞を見ると蟻が嬰兒を盲にしたと云ふ記事があつたので、早速其を診察した栃木縣芳賀郡眞岡町の眼科醫織田玄吾氏に其の病狀の通知と、若しあれば其の蟻の標本を送つて貰ふことを依賴した其の返事の大略を次に載せる。

『該患者は赤貧洗ふが如き賤家に生れたる生後二十二—三日の嬰女にして、父は出稼にて不在中、母は六才なる男兒を連れ、床上に眠れる赤子を其のまゝに他出し、三時間半後歸宅せるに、數百千の蟻は黑山の如く赤兒の顏面・眼球・眼瞼・鼻孔・口唇・耳孔等に附着せり。診斷せるは已に四時間後にて左右の眼球白色に變じ、翌日は角膜潰瘍に罹り居れり、之蟻酸中毒の爲なり。身體甚しく疲勞せり。後數日にして濃瘍に變じ、今日にては生命のみは助かりたるも兩眼共に明暗を辨ずる位なり。』(後略)

尙加害せし蟻の標本數疋を送られたのを檢すると、トビイロケヤリ (*Lasius niger*) であつた、或は其の變種かとも思ふけれども標本が少くて確かめることは出來なかつたが、何れにしても大した差のないものである。蟻が獸類を害することは熱帶ではあることであるし、內地でも犬の兒などに蟻がたかることがあるから不思議はないとしても、餘り聞かない例のやうだから玆に記して置く。他に若し類例があれば御通知を得たい。(矢野宗幹)

●メカヂキの「ペンネラ」

今年三月十三日、房州產のメカヂキに寄生して居たといふ大きな「ペンネラ」の標本を二個得た。是は二個共頭部が無くて不完全であるから、何れ完全な標本を得てからと思つて居たが、まだそれが手に入らぬ故、取あへず其不完全な標本に就て報告をして置く。

測定表は下の如くである。

	標本 I	標本 II
頸部の長さ(前端切れたる儘)	一六・〇糎	一七・五糎
同 幅(中央部に於る)	二・五粍	二・八粍
生殖節の長さ	六・一糎	五・八糎
同 幅(中央部に於る)	五・〇粍	五・〇粍
後胴部の長さ	三・一糎	三・八糎
同 幅(中央部に於る)	三・〇粍	二・八粍
卵糸の長さ	?(破損)	同 上
同 幅	約〇・五粍	約〇・五粍

NII-Electronic Library Service